

第7節 近世以降の調査成果

1 概要(第116図)

近世以降では、炭窯SK7、製炭土坑SK6を検出した。SK7は、イチジク形の平面形となる積み石造りの半地下式ドーム型木炭窯で、奥壁に2つの煙道、床面には排水溝が備えられていた。SK6は、素掘りの製炭土坑である。

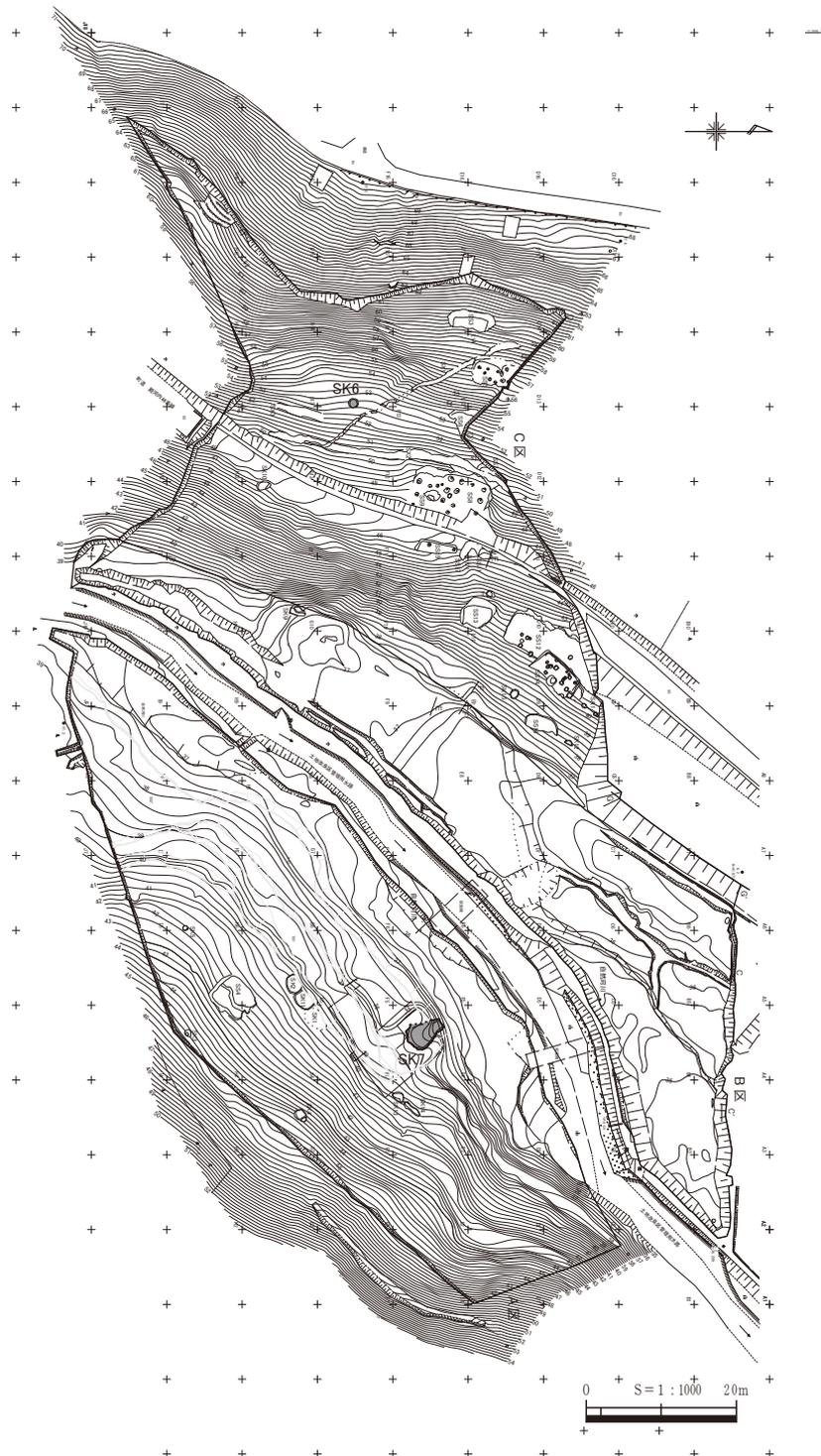
いずれも出土遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、放射性炭素年代測定の結果、SK7は19世紀以降、SK6は17世紀から18世紀以降のものと考えられる。

2 炭窯

SK7(第117~119図、PL.26・27)

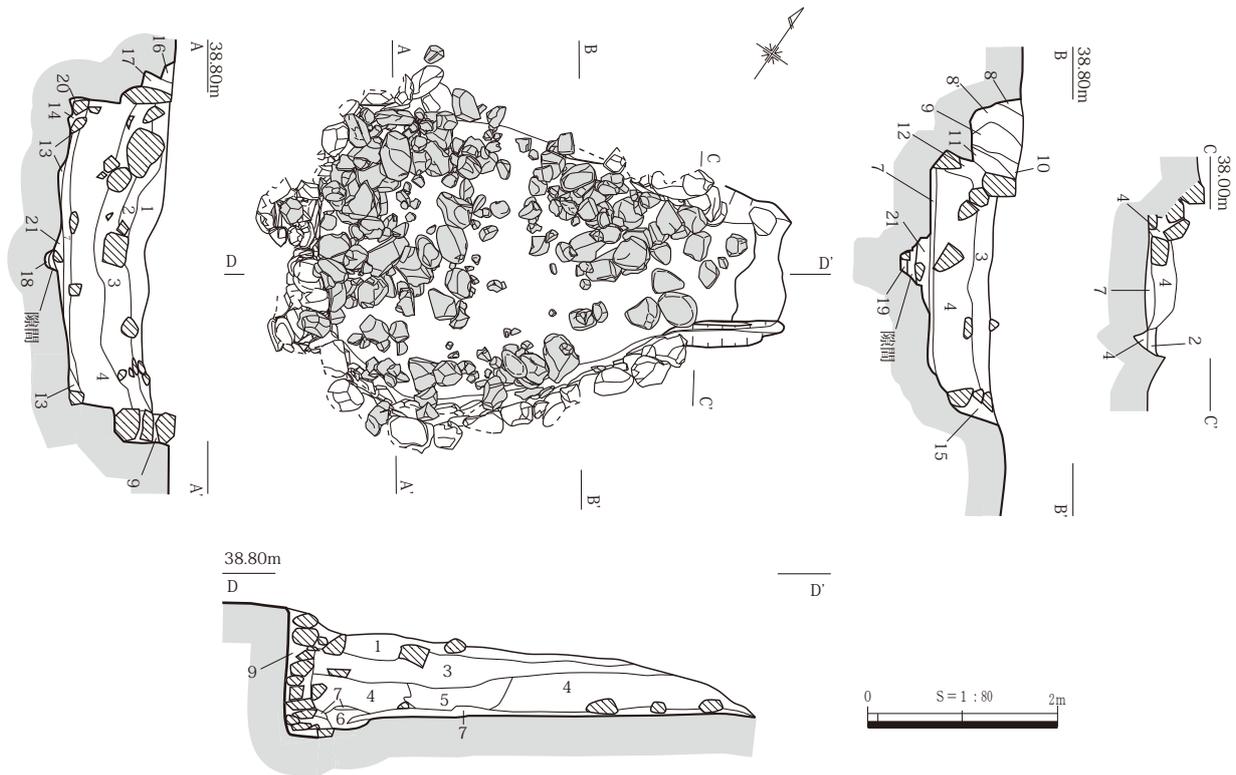
A区中央やや北西側のE4グリッドにあり、標高37.1~38.4mのSS2平坦面から裾部にかけて立地する。調査前から大きな窪みとして認識されていた箇所である。

平面形は、検出面で細長いいわゆるイチジク形を呈し、長軸4.7m以上、窯中央部で幅3.0m、焚口幅1.4mを測る。底面では長軸4.7m以上、窯中央部で3.1m、焚口幅1.3mを測る。焚口は西北西を向き、河川に向かって開口する。焚口は上部が崩落、削平されており、深さ最大1.19mを測る。焚口部から燃焼部の側壁は、下半は基盤層を高さ0.4m程度に段状に掘り、その上に拳大から人頭大の川原石を4段以上に亘って積み上げており、下半は土壁、上半は積み石壁となるが、奥壁側正面の、排煙口に挟まれた範囲は、基底部から石積みとなる形態である。掘方と石積みの間はローム土を用いて裏込めがなされ、窯壁の表面は、粘土(ローム土か)によって目張り、被覆が施され、タールと木炭粉が付着していた。遺存する壁は、上部に向かってわずかに持ち送られている。埋土中から多量の川原石が出土していることから、本来



第116図 近世遺構配置図

基盤層を高さ0.4m程度に段状に掘り、その上に拳大から人頭大の川原石を4段以上に亘って積み上げており、下半は土壁、上半は積み石壁となるが、奥壁側正面の、排煙口に挟まれた範囲は、基底部から石積みとなる形態である。掘方と石積みの間はローム土を用いて裏込めがなされ、窯壁の表面は、粘土(ローム土か)によって目張り、被覆が施され、タールと木炭粉が付着していた。遺存する壁は、上部に向かってわずかに持ち送られている。埋土中から多量の川原石が出土していることから、本来

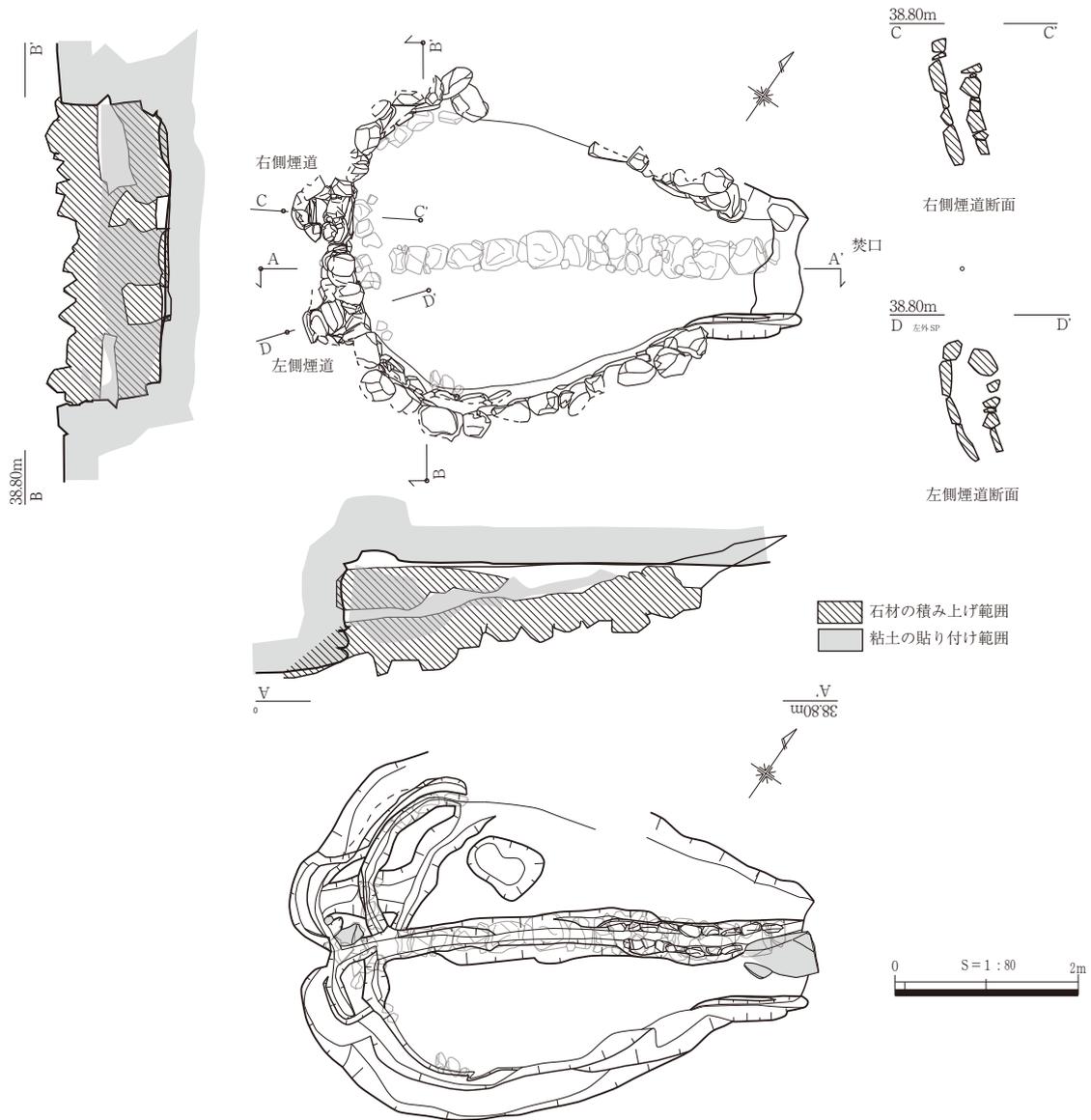


- | | |
|---|---|
| <p>1 暗褐色土 (10YR 3/3)
φ 5 ~ 10 cm 大の礫が10%混じる。</p> <p>2 黒褐色土 (10YR 2/2)
φ 1 ~ 2 cm 大の礫が30%混じる。腐植土。</p> <p>3 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
φ 5 mm 大の炭片が混じる。</p> <p>4 褐色土 (10YR 4/6)
木炭と、被熱した橙色の礫・天井材の粘土塊を多量に含む。</p> <p>5 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
φ 1 ~ 8 cm 大の炭片・焼土塊が混じる。</p> <p>6 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
攪乱か。</p> <p>7 木炭の細片。5 ~ 10 cm の厚さで均質・密に締まる。</p> <p>8 暗褐色土 (10YR 3/3)
締まりのない8層。根の攪乱あるいは壁の崩落に伴ってもろくなったもの。</p> <p>9 褐色粘質土 (10YR 4/4)
裏込め土。</p> <p>10 褐色土 (10YR 4/6)
流入土か。</p> <p>11 オリーブ褐色砂質土 (2.5Y 4/3)
裏込め土。φ 5 ~ 1.5 mm 大の礫が混じる。</p> | <p>11-2 11 層と 8 層の混じり。</p> <p>12 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) 流入土か。</p> <p>13 にぶい黄色粘性シルト (2.5Y 6/3)
木炭片が混じる。窯壁の崩落堆積か。</p> <p>14 褐色土 (10YR 4/4)</p> <p>15 黒褐色土 (10YR 2/3)
φ 1 ~ 2 cm 大の礫が10%混じる。締まり悪い。壁石の近くは焼けて明褐色 (7.5Y 5/6) 化する。</p> <p>16 黒褐色土 (10YR 2/3)
17 層の土粒が混じる。固く締まる。</p> <p>17 暗褐色土 (10YR 3/4)
炭粒が混じる。固く締まる。</p> <p>18 にぶい黄褐色シルト (10YR 4/3)
炭片が多く混じる。排水溝内堆積物。</p> <p>19 暗オリーブ色シルト (5Y 4/4)
排水溝内堆積物。</p> <p>20 灰黄褐色土 (10YR 4/2)
微細な炭片・焼土が混じる。流入土か。</p> <p>21 淡黄色粘質ロームブロック (2.5Y 8/4)</p> |
|---|---|

第117図 SK7 廃絶時状況

はかなり高い天井部を構成していたものと考えられる。焚口から向かって右側に川原石が集中することから、主として右側の壁が崩落したことが推定される。奥壁基部には排煙口が排水溝を挟んで2箇所設けられ、奥壁側上部に向かって石積みによる煙道に接続する。焚口から見て左側の排煙口は、幅60cm、高さ8cmの方形、右側の排煙口は、幅60cm、高さ14cmの方形に開口する。左右の排煙口は幅60cmの間隔をとる。煙道は左右ともに75°の角度で外傾している。検出時、煙出口は大きな川原石を被せて塞がれていた。

左右の排煙口から壁際に沿って、窯床の最大幅の位置まで、大型の石を壁に食い込ませてあった。この石の裏側の壁は外向きに挟られて、石裏との間に空洞が作られており、煙道に接続していた。お



掘方及び排水溝側石

第118図 SK7

そらく通風孔としての機能があったものと推測される。

底面は約10.1㎡を測り、8cm前後の黒炭層が形成されている。底面中央には、幅0.3~0.48m、深さ0.3m程度、長さ4.6m以上の排水溝が設けられていた。焚口から1.9mまでの長さのみ、溝内の両側面に石を立て並べ、溝の上部は石で蓋をされ、さらに埋め戻されている。奥壁際にも溝が掘りこまれ、排水溝と接続する。こちらの溝の上部も石で蓋をしたのちに埋め戻されていた。排水溝の底面は、緩やかに焚口側へ向かって傾斜している。また、焚口左側の壁際に沿って、長さ1.2m、幅0.15m、深さ0.15mの断面V字形の溝が掘りこまれている。補助的な排水溝として機能していたものと推定される。

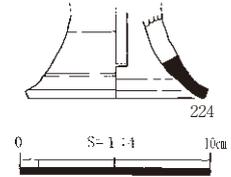
埋土下層は、木炭・焼土を多量に含む褐色土が厚く堆積しており、天井崩落土と考えられる。出土した粘土塊の大きさから、天井の厚さは30cm前後と復元される。炭焼窯を覆う上屋の痕跡は検出できなかった。

埋土中から、TK209併行期と考えられる須恵器高坏脚部片224が出土しているが、混入したものである。また、埋土中から多量の炭化材が出土したが、炭化材の樹種同定の結果、5点すべてマツ属複雑維管束亜属と判明した。

炭化材のAMSによる放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で $130 \pm 20\text{BP}$. という数値を得た。暦年較正では19世紀ごろのものとされた。

出土炭化材から、黒炭を製作した木炭窯と推定される。窯の形態的特徴については、「八名がま」に類似点が認められる¹⁾。黒炭製作窯の平面形および煙道の配置、白炭製作窯の石と粘土で築く窯壁と石組みの煙道という、両者の特徴を折衷したかのようなものである。このことからSK7の炭焼窯が操業されていた時代は20世紀はじめごろの可能性も考えられる。

調査中、炭焼窯の床面は湧水が著しく、中央の排水溝の内部は粘土が堆積して詰まっていたことから、操業中の燃焼効率はかなり低かったものと推定される。また、窯体を大型化(八名がまの設計図の寸法の1.4~1.5倍)したことにより、天井の重量も相当なものとなり、崩落の要因となったことが推測される。



第119図 SK7 出土遺物

註1 「八谷がま」は1914年(大正3年)に愛知県から鳥取県に製作技術が伝えられたとされる。
鳥取県薪炭協会1975『鳥取県木炭誌』

3 製炭土坑

SK6 (第120図、PL.26)

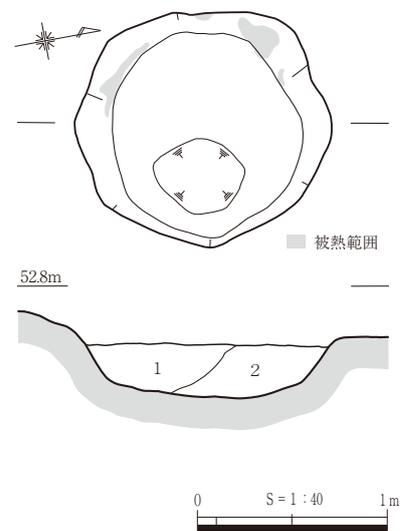
C区中央やや南側のF13グリッドにあり、標高52.3~52.8mの急斜面が途中やや緩やかになる斜面部に立地する。北側約3mにはSX1がある。

平面は円形を呈し、長軸1.3m、短軸1.22m、深さ最大0.29mを測る。断面不整な逆台形状を呈す。底面は緩やかに湾曲している。西側壁がよく焼けて赤化している。底面には赤化した箇所は見られない。

埋土は、2層に分層できたが、いずれも黒褐色土系の埋土で炭化材や粉炭を多量に含むものである。炭化材の樹種同定の結果、マツ属複雑維管束亜属と判明した。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、埋土中の炭化材について、AMSによる放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で $250 \pm 20\text{BP}$. という数値を得た。暦年較正では17世紀中ごろから18世紀後半と考えられており、この年代値に従うこととする。

埋土中から炭化材が多量に出土すること、壁が焼けて赤化していることから、近世の製炭土坑と考えられる。



- 1 暗褐色シルト(10YR3/3) 木炭多い。
- 2 黒色シルト(10YR1.7/1) 木炭多い。
木炭粉含む。均一。

第120図 SK6